

# 『切韻』反切の諸來源

—反切下字による識別—

遠藤光暁

## 1. はじめに

『切韻』に表わされた音韻體系がいかなる性質をもつかの問題は長らく論争的になっており、現在に至るまで決着が<sup>(1)</sup>ついていない。

『切韻』の編定者である陸法言が「序」において自ら記すところによると、『切韻』は次のような過程を経て完成した。まず隋の開皇初期のある晩に當時の有力な知識人らが參集して従來の韻書を批判しつつ押韻基準を論定したものを陸法言が記録し、その後さらに廣く有識者の意見を聞いた上で『切韻』のエッセンスとなるものが出來上がった。それから十數年後に免官されて私塾で教えるようになって韻書を編む必要に迫られたが、かつて押韻基準を定めた諸學者は既に他界していたり、存命の者も陸法言が自宅謹慎中の身であったため質問することがかなわず、そこで自分一人で以前に記しておいた梗概に沿って諸家の韻書や字書を元に『切韻』の定稿を行なった、と。

押韻基準を決めたのが南北さまさまの他の出身者であることや六朝の諸先行韻書を參考にしていることから、『切韻』は古今南北の音系を綜合したものであるとする考えが一方で提出されている。この説を最も鮮明に打ち出しているのは陸志章氏であり、「切韻序説得清清楚楚、那部書是匯通南北古今的、而且不是陸法言一個人的意見。所用的反切是從六朝的韻書鈔錄下來的。他們的來歷跟經典釋文也差不多。…陸法言的原意，在乎調和當時的各種重要方言。…隋唐的任何方言恐怕都不需要 300 類的切下字來代表。…王仁昫韻的韻目注明六朝某書的某韻跟某韻相同，某韻跟某韻雜亂，陸法言把那些韻一律分開。其中有些細微的分別在隋初的方言裡恐怕已經不常遇見。…切韻所代表的韻類的界限實在不妨說比第六七世紀還來得古舊些。切韻代表六朝的漢語的整個局面，不代表任何一個方言。」<sup>(2)</sup>と言っている。

一方、『切韻』の最終的な定稿は陸法言が單獨で行なっていることからすると、『切韻』は單一の音系を反映するものだとする考えもありうる。この説を『切韻』の反切を根據にして最も精細に論述しているのは平山久雄氏であり、『切韻』は分韻上は南方系の韻書における精密な韻の審定方式を採り入れつつも、小韻の区分および反切は陸法言の方言の音韻體系を反映するものだとし、後に『切韻』の反切が先行する音韻資料に依據したものである可能性は認めつつも、「……少なくとも原則としては、撰定者（恐らく陸法言自身、引用者補）の口唱による吟味を経て、差し支えないと認められた用字はそのまま取り入れられ、適切でない<sup>(3)</sup>と認められた用字はそれを改めた上で取り入れられたと考えられる。このような意味において、『切韻』反切の大部分はすぐれて音聲的な性格と反切撰定者の音聲體系を媒介とする均質性とを具えているとみてよいであろう。」と

して更にこの説を補強した<sup>(4)</sup>。

上で見た陸・平山兩氏の所説はこの問題に關する諸説の兩極に位置するものであるが、兩説が決着を見ないのは、『切韻』の編纂過程自體がこの二つの側面を持つからである。これまで分韻のレベルにおいては王仁昫『刊謬補缺切韻』などの韻目下注<sup>(5)</sup>によって具体的に『切韻』が諸先行韻書の特質をどの程度うけ継ぎ、陸法言(ら)がどの程度それに手を加えたかがかなり明らかになっている。更に切韻音系推定の最も一次的な根據である反切に關してそのような見極めがつかずならば、『切韻』の性質に對する理解を一層深めることができよう。このほど『切韻』の反切下字の分布を調べたところ、王韻などの韻目下注によって知られる所據韻書の來源の違いに應じて用字の選擇と韻内分布に相違が見られることが見出された。これを糸口として『切韻』反切の來源を識別することが一定程度に可能であると思うので、以下でそれを報告したい。

ところで、陸法言『切韻』の原本は今ほろびていてそのままの形では見ることができない。そこで、清朝以來『切韻』を論じる場合にはその代用として『廣韻』が使われ、近時では完本王韻が使われてきた。しかし、現今では切韻系韻書の唐代諸寫本の判讀や比較が進み、より高い精度で陸法言『切韻』の原貌に接近することが可能になっている。小文の基礎資料とする上田正氏の『切韻諸本反切總覽』<sup>(6)</sup>は現在の研究水準における最善の努力を盡くして陸法言に由來する小韻と反切を推定しており、以下ではそれらを單に『切韻』と稱する。ただし、上田氏も「凡例」で觸れておられるように、殘卷の少ない部分では推定が不確實にならざるを得ない。だが、反切用字についてはそもそも切韻諸本における差異が小さいから、この推定に對する異論が出る餘地はさほど大きくない。また、増加小韻の認定についてはそれよりもやや誤差の幅が大きいかもしれないが、その場合でも韻末のたかだか數小韻が問題になる程度であり、今後推定の精度を更に高めることができたとしても上田氏の推定の大綱は動かない見通しである。

## 2. 發 端

さて、『切韻』の反切を冒頭の韻から通覽していくと不思議な現象にぶつかる。まず東韻であるが、一等韻相當の韻母の小韻が14あるうち12が“紅”を反切下字としており、三等韻相當の韻母の小韻が18あるうち15が“隆”を反切下字としている。更に見ていくと、江韻は15小韻あるうち14までが“江”を反切下字としており、ここで唯一“雙”を反切下字にとっている“江”の小韻は自らと同じ字を反切下字とすることが不可なため別の字となっているのであるから、事實上この韻は完全に同一の反切下字に統一されていることになる<sup>(7)</sup>。

反切の用字は同じ音類に屬せばどの字を使ってもよいわけではなく、注音の手段なのであるから易識易寫の常用字でありかつ多讀字でないことがまず要求され、更に音聲的に好ましい條件を備えた字が選ばれる傾向もある<sup>(8)</sup>。この意味では、反切下字が特定の字に集中することはむしろ期待される所ではある。そして江韻の場合などは、反切下字の候補として“江・扛・杠・邦・雙・窓・腔”などを擧げることにはできるものの、これらの中では“江”が反切下字として格段の適性をもつため期せずしてこの一字に集中したのだとする解釋も有り得よう。しかし、江韻のようなケースはやや極端であり、普通は

### 『切韻』反切の諸來源

反切下字として同程度の適性をもった字がいくつか存在する。例えば、東韻の場合、一等韻相當の韻母では“公・功・工・洪・東”など、三等韻相當の韻母では“弓・宮”などは反切下字としての諸々の要件を満たす字であり、現に『玉篇』などにはそれらの字を反切下字として使用している例がかなりある。それにもかかわらず、『切韻』において東韻の反切下字が一等韻相當韻母で“紅”，三等韻相當韻母で“隆”というそれぞれ一字のみに集中するからには、意圖的に反切下字を揃えたものと考えざるを得ない<sup>(11)</sup>。この點は、例えば支韻の反切下字の分布状況と對比すると一層はっきりする。支韻では、28小韻ある開口韻母の反切下字は“移”が10，“支”が7，“羈”が4，“宜”が3，“知”が2，“奇”が1，“離”が1となっており、24小韻ある合口韻母の反切下字は“爲”が12，“垂”が4，“隨”が3，“規”が2，“危”が1，“羈”が1，“支”が1となっている。このように反切下字がいくつかの字にバラつく方が本來期待される所である。

かといって、『切韻』の全ての韻が東韻や江韻のように単一の反切下字をとるわけではなく、支韻のように多数の反切下字を用いる韻も少なくない。そこで、『切韻』の反切がすべて陸法言の手になるものだとすると、何故ある韻では反切下字を一字に揃え、ある韻ではそうしなかった、という不統一が生じたかが疑問となる。一方、『切韻』は諸先行韻書を参考にして編纂されているのだから、收字や反切に至るまでそれらの資料から引き寫したことは十分あり得ることである。そして、『王韻』などの韻目下注から知られるように、それぞれの韻で基づいた韻書が異なるとするならば、その來源の違いに應じて反切下字の分布の違いが生じてもおかしくはない。そこで、この推論を検證するために以下の節において『切韻』の全韻における反切下字の分布状況を調査し、『王韻』などの韻目下注から知られる先行諸韻書の來源と比較してみよう。

### 3. 反切下字の韻内分布のタイプ

反切下字の韻内分布のタイプは、大類としては次の3つが認められる。第1に、江韻のように韻内で単一の反切下字が使用され、その単一字のみが別の反切下字をとるタイプがあり、これをⅠ類とする。第2は、東韻（一等韻母・三等韻母ともに）のように一韻（母）内で単一の反切下字を集中的にとる傾向のあるもので、これをⅡ類とする。第3は、支韻（開口・合口ともに）のように、一韻（母）内で単一の反切下字を集中的に使用することがないもので、これをⅢ類とする。なお、いま例に挙げた東韻や支韻のように一韻内に複数の韻母を含むものは、それらを分けた上で反切下字の分布のタイプ認定を行なう。その際、唇音の歸屬は便宜的に『切韻』自體の排列に従い、開口韻母の小韻群の中に排列されている場合は開口とし、合口韻母の小韻群の中に排列されている場合は合口とする。

各大類を更に細かく見るといくつかのパリアントがあり、それらの下位分類を行なうことが可能である。

まず、Ⅰ類について。この中で最も整然とした構成になっているのがa小韻であり、このタイプでは第1小韻字（普通はその冒頭字）が他の全小韻の反切下字となり、しかも第1小韻の反切下字は第2小韻冒頭字となっている。例えば、敢韻は第1小韻が“敢，古覽反”，第2小韻が“覽，慮敢反”，それ以下のすべての小韻では“敢”が反切下字と

なっている。また、これとはほぼ同じだが、第1小韻の反切下字が第2小韻冒頭字以外の場合をa'とする。例えば江韻がそれで、第2小韻以下がすべて第1小韻字“江”を反切下字にとることはaと同じだが、第1小韻“江”の反切下字は第9小韻字の“雙”となっている。次に、第2小韻冒頭字が他の全小韻の反切下字となる場合があり、これをbとする。例えば、隱韻は第1小韻が“隱，於謹反”，第2小韻が“謹，居隱反”で、以下すべての小韻では“謹”が反切下字となっている。最後に、a・a'・b以外の場合、即ち第3小韻以下の字が他の全小韻の反切下字となるものをcとする。例えば、添韻では第6小韻の“兼”が他の全ての小韻の反切下字となっている。この小類に該当する韻は次の通り（カッコ内は単一反切下字がある小韻の番號）：

平聲：殷 (3)，刪開 (7)，先合 (21)，唐合 (10)，添 (6)。

上聲：講 (4)，耿 (3)，勳 (3)，馬合2 (20)，蕩開 (11)。

去聲：暮 (6)，霰開 (9)，嘯 (3)，徑開 (5)。

次にⅡ類について。この中には反切下字の相違に音聲的な傾向の見られるものがあり、それをaとする。例えば、陽韻開口は“良”を反切下字にとる小韻が優勢だが、唇音小韻では“方”が“良”を反切下字とする他はすべて“方”を反切下字としている、など。この小類に該当する韻は次の通り（カッコ内に音聲的條件と、その条件下で用いられる反切下字およびその聲母を記す）：

平聲：文（唇音P分—牙喉音f云），陽（唇音P方—その他l良），庚開三（唇音P兵—牙喉音k京）。

上聲：軫合（B類f殞—その他j尹），吻（清音P粉—濁音m吻），獮合（B類以外はj兗），哿開（牙喉音ŋ我—その他k'可）。

去聲：志（牙喉音k記—その他l吏），代（牙喉音ʔ愛—その他d代），廢（唇音P廢—牙喉音ʔ穢），震開（B類k觀—その他n刃），問（唇音m問—牙喉音f運），願合（唇音m万—牙喉音ŋ願），恩（唇音m問—その他k'困），号（唇音P報—その他t到），禡2合（唇音k駕—その他x化），梵（唇音b梵—牙喉音k劔）。

入聲：月合（唇音P發—牙喉音ŋ月）。

これとは別に、反切下字の分布が小韻の配列順と関連する場合がある。このタイプのうち、末尾部の少数の小韻を除くとⅠ類であるものをbとする。例えば、東韻一等相當韻母は1-2, 21-32小韻にあるが、最終小韻の第32小韻が“同”を反切下字とする他は（“紅”の屬する小韻を除き）全ての小韻で“紅”を反切下字としている。同様の分布を示す韻は次の通り（別の反切下字を使う部分が始まる小韻をカッコ内に記す）：

平聲：東—f紅 (32)，元合f衰 (12)，痕f痕 (4)，覃f含 (14)。

上聲：腫l隴 (12)，皓f浩 (9)，養l兩 (25)，靜開j郢 (13)，尾合f偉 (12)。

去聲：封開k懈 (14)，怪開k界 (14)，諫開ʔ晏 (13)，禡開三j夜 (29)，證tɔ證 (6)，鑑k鑑 (7)。

また、末尾部ないし冒頭部の少数の小韻を除くとⅡc（下述）であるものをb'とする。下の擧例ではやはり別の反切下字を使う部分が始まる小韻をカッコ内に記すが、

“;”の後に挙げた韻は冒頭部の方が別の反切下字を使用するものであり、それらについては異質部分の始めと終わりの小韻を記す：

平聲：脂開 t<sub>ə</sub> 脂 (37-38・41)，微合 P 非 (13)，談 k 甘 (11)，蒸 l 陵 (18)；先開 f<sub>ɪ</sub> 賢 (1-5・16)，肴 k 交 (1-3)。

上聲：齊 l 禮 (15)，海 f<sub>ɪ</sub> 亥 (8)，有 k 久 (18)；賭 dz 罪 (1-4)。

去聲：遇 ɲ 遇 (24)，響 k 計 (18)。

入聲：麥 k 革 (15)。

以上のタイプに該当しないものを c とする。つまり、別の反切下字が散發的に混じり、音聲的な條件や小韻配列の順序からはそれらの使い分け規則が見出しがたいものである。例えば、東韻三等相當韻母はほとんどの小韻で“隆”を反切下字にとるが、第6小韻(透母)と第13小韻(明母)では“中”を反切下字としている。

最後にⅢ類について。この類においても反切下字の分布に音聲的な傾向の認められるものがあり、それを a とする。以下の韻(母)がこの小類に屬す(なお下の挙例では反切下字を必ずしも網羅的に挙げていない)：

平聲：支開(B類・羈，その他・支移)，脂合(唇音B類・悲，牙喉音B類・追，その他・佳)；虞(牙喉音・俱，齒音・朱，唇音・夫)；哈(精組・才，その他・來哀)；眞開(B類・巾，その他・隣珍)；宵(B類・喬駟，章組・招，その他・遙焦)；青開(舌音・丁，その他・經形)。

上聲：獮開(唇音B類・免辯蹇，牙喉音B類・蹇鞏，その他・演善)；迴開(舌音・鼎，その他・挺)。

去聲：送 ʒ (唇音・諷鳳，その他・仲)；至開(牙喉音B類・器，その他・至利四二)；至合(牙喉音B類・位，唇音B類・秘媚備，牙喉音A類・季，その他・類醉遂)；未合(唇音・沸味，牙喉音・謂貴畏)；夬合(牙喉音・夬，唇音・邁)；隊(唇音・佩背配，その他・對)；翰合(唇音・半，牙喉音・段，その他・亂段)。

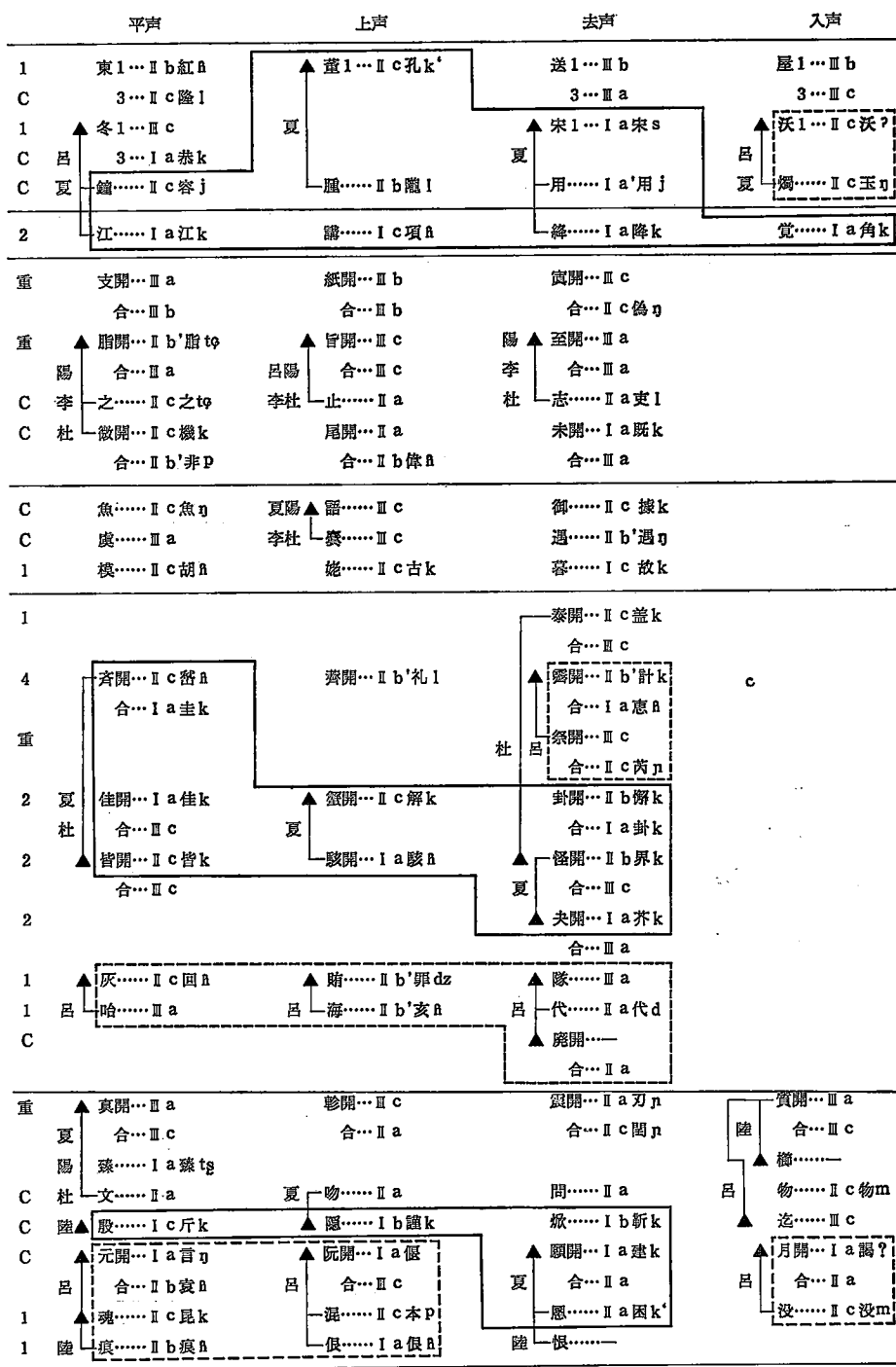
入聲：質開(唇音B類・筆密，唇音A類・必蜜吉，牙喉音B類および莊組・乙，その他・質栗吉)；葉(B類および舌音・輒，その他・涉葉)；德開(唇音・北，その他・德則)。

また、韻内のある部分がⅠ類ないしⅡ類となっているものがあり、これを b とする。なお、ある音類に屬する小韻が韻内のある部分に固まって現われ、Ⅲ a と見做すかⅢ b と見做すか決定が困難な場合がある。この小類については別稿で詳しく検討する豫定なので、ここではこれ以上たちいらない。ほか、a小類やb小類のように音聲面や排列上で秩序が認められないものを c とする。ただし、今さしあたりⅢ c と認定したものの中にも局部的にはⅢ a やⅢ b に近いものがあり、今後の一層精密な分析によって歸屬を再考すべきものが含まれている。

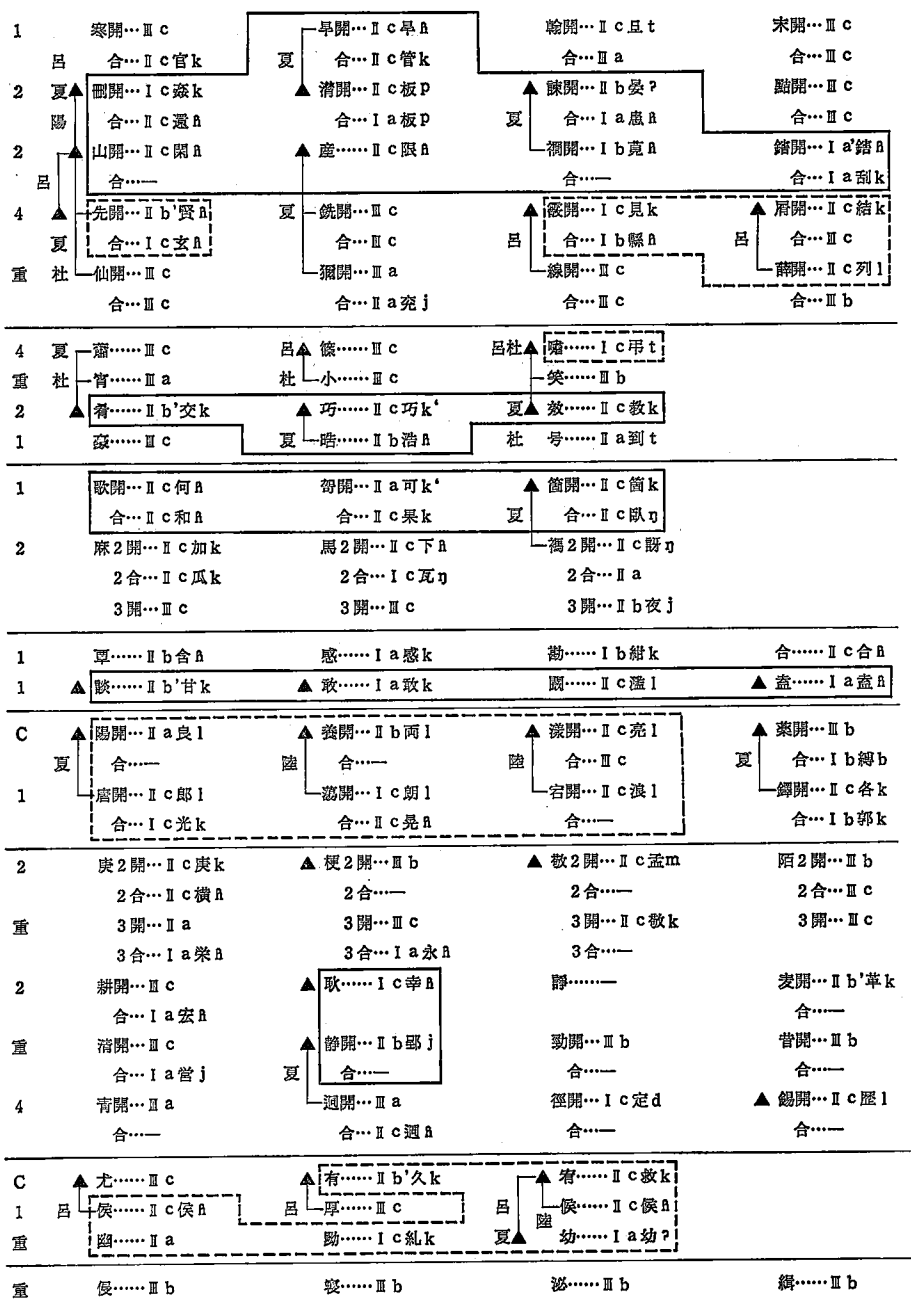
#### 4. 全韻における反切下字の分布状況

さて、前節で行なった分類に基づいて反切下字の韻内分布を『切韻』の全韻について見てみよう。次頁以下の表では、まず左端に韻の等韻學的分類を示す。“1”は一等韻、

日本中國學會報 第四十一集



『切韻』反切の諸來源



重	寗……Ⅱ c廉 l	▲ 琰……Ⅱ b	▲ 曉……Ⅱ b	▲ 業……Ⅱ a
4	添……Ⅰ c兼 k	陸 添……Ⅱ c	陸 添……Ⅰ b念 n	陸 佔……Ⅰ c協 a
C	蒸……Ⅱ b'陵 l	拯……—	證……Ⅰ b證 tɕ	職開……Ⅰ c力 l 合……—
1	登開……Ⅱ b 合……Ⅰ a弘 a	等……Ⅰ a'等 t	證……Ⅱ c	德開……Ⅱ a 合……—
2	▲ 威……Ⅰ a'威 a	▲ 微……Ⅱ c減 k	▲ 隨……Ⅰ a隨 a	▲ 治……Ⅰ a'治 a
2	夏 衙……Ⅰ a'衙 a	夏 經……Ⅰ a'權 a	▲ 鑑……Ⅱ c鑑 k	夏 狎……Ⅱ c甲 k
C	敵……Ⅰ a敵 ɲ		夏	業……Ⅱ c
C	凡……—	范……—	梵……Ⅱ a	陸 乏……Ⅰ b法 p

“2”は二等韻，“4”は四等韻，“重”は重紐韻，“C”はC類韻である。また、一韻の中に開合や等位の異なる複数の韻母がある場合には分けて表示する。例えば，“東1”は東韻一等相當韻母，“東3”は東韻三等相當韻母を指し，“支開”は支韻開口，“支合”は支韻合口を指す。“…”の後にその韻（母）の反切下字分布のタイプを表示するが、小韻数が少ないため分類不可能のものは“—”とする。更にⅠ類とⅡ類の場合、その韻内で優勢な反切下字を末尾に付し、その字の聲母をその後に音聲記號で記す。

五家韻書の來源については、『切韻』中の當該韻の分韻に關與しているもののみを表示する。▲が分韻された韻で、その相手の韻を線で示し、これら分韻している韻書の作者を脇に記す（“呂”は呂靜，“夏”は夏侯詠，“陽”は陽休之，“李”は李概，“杜”は杜臺卿）。例えば、冬韻の場合、呂靜と夏侯詠が鐘韻・江韻とは別韻としており、陸法言（ら）は呂・夏侯に依って冬韻を分韻した、など。なお、注が込み入っているため表中で表示できない韻についてここで説明しておく。談韻には“呂與衙同，陽、夏侯別，今依陽、夏侯。”とあり、表例からすると衙韻に線を引いて脇に“陽夏”と記す所だが、衙韻がはるか後にあるため表示しない。それに相配する敢韻も鑑韻まで線を引き脇に“夏”と記すべき所である。盍韻の注は缺損があるが、敢・鑑韻と平行する状況であったことはほぼ疑いない。梗韻には“夏侯與靖同，呂別，今依呂。”とある。“靖”は“靜”と同小韻に屬する。本來は靜韻まで線を引き“呂”と付記したい所だが、表では歌韻と線が交錯するため記さない。敬韻には“呂與靜勁徑同，夏侯與勁同，與靜徑別，今並別。”とあり、敬韻を靜徑と別韻にするのは夏侯詠によるが、あとは陸法言（ら）が分韻したことが分る。歌韻には“李、杜與梗迥同；呂與靖迥同，與梗別；夏侯與梗靖迥並別；今依夏侯。”とあり、梗韻と別韻にする點は呂靜と夏侯詠により、靜・迥韻と別韻にする點は夏侯詠によったことになる。錫韻には“李與昔同；夏侯與陌同；呂與昔別，與麥同；今並別。”とあり、昔韻と別韻にする點は呂靜により、あとは陸法言（ら）が分韻を行なったことが分る。

なお、後の議論の結果、主要部分が呂靜または夏侯詠に由來すると推定される韻を、作表の便宜上ここで表示しておく。主層が夏侯詠に由來する韻は實線、呂靜に由來する韻は破線で圍んで示す。



## 5. 夏侯詠『韻略』に由来する諸韻の特徴

さて、『切韻』の分韻に最も多く與かっているのは夏侯詠『韻略』であることが韻目下注により分る。できるだけ單純で均質的な條件にあるものから比較に入るのが方法論的に有利であるから、糸口としてまず夏侯詠に單獨で従って分けた韻について検討してみよう。それらの韻は次の通り（分韻の相手方の韻を←の後に示す）：

平聲：陽（開Ⅱ a 良 l，合—）←唐（開Ⅱ c 郎 l，合Ⅰ c 光 k），

咸（Ⅰ a' 咸 f<sub>h</sub>）←銜（Ⅰ a' 銜 f<sub>h</sub>）。

上聲：董（Ⅱ c 孔 k'）←腫（Ⅱ b 隴 l），

蟹（Ⅱ c 解 k）←駭（Ⅰ a 駭 f<sub>h</sub>），

隱（Ⅰ b 謹 k）←吻（Ⅱ a），

潛（開Ⅱ c 板 p，合Ⅰ a 板 p）←旱（開Ⅱ c 旱 f<sub>h</sub>，合Ⅱ c 管 k），

産（Ⅱ c 限 f<sub>h</sub>）←銑（開Ⅲ c，合Ⅲ c）・獮（開Ⅲ a，合Ⅱ a 兗 j），

巧（Ⅱ c 巧 k'）←皓（Ⅱ b 浩 f<sub>h</sub>），

敢（Ⅰ a 敢 k）←檻（Ⅰ a' 檻 f<sub>h</sub>），

耿（Ⅰ c 幸 f<sub>h</sub>）←梗（開2 Ⅲ b，開3 Ⅲ c，合2—）・靜・迥，

靜（開Ⅱ b 郢 j，合—）←迥（開Ⅲ a，合Ⅱ c 迥 f<sub>h</sub>），

賺（Ⅱ c 減 k）←檻（Ⅰ a' 檻 f<sub>h</sub>）。

去聲：宋（Ⅰ a 宋 s）←用（Ⅰ a' 用 j）・絳（Ⅰ a 降 k），

夬（開Ⅰ a 芥 k，合Ⅲ a）←怪（開Ⅱ b 界 k，合Ⅲ c），

願（開Ⅰ a 建 k，合Ⅱ a）←愿（Ⅱ a 困 k'）・恨（—），

諫（開Ⅱ b 晏 ʔ，合Ⅰ a 患 f<sub>h</sub>）←禫（開Ⅰ b 覓 f<sub>h</sub>，合—），

箇（開Ⅱ c 箇 k，合Ⅱ c 臥 ɲ）←禡（開2 Ⅱ c 訝 ɲ，開3 Ⅱ b 夜 j，合2 Ⅱ a），

陷（Ⅰ a 陷 f<sub>h</sub>）←鑑（Ⅱ c 鑑 k）。

入聲：盍（Ⅰ a 盍 f<sub>h</sub>）←恐らく狎（Ⅱ c 甲 k），

藥（開Ⅲ b，合Ⅰ b 縛 b）←鐸（開Ⅱ c 各 k，合Ⅰ b 郭 k）。

洽（Ⅰ a' 洽 f<sub>h</sub>）←狎（Ⅱ c 甲 k）。

こうして見ると、ほぼ全てがⅠ類かⅡ類（ただしⅡ a は少ない）であり、しかも多くは見母か匣母の字が単一の反切下字となっている。単一反切下字が見・匣母以外の場合は、例えば宋韻のようにそもそもその韻に見・匣母字が存在しないか、存在しても董韻の匣母字のように僻字であるため反切下字に適さないなどの事情が概ね考えられる。このように、夏侯詠に單獨で従って分けた韻において反切下字を見・匣母字に揃えるという獨自の特徴が認められるからには、これらの韻は単に分韻基準の面で夏侯詠に據った<sup>(13)</sup>だけでなく、反切自體も夏侯詠『韻略』のものを引き寫したものとよからう。

このように韻目下注と反切下字の分布という全く別の方面の徵證が期せずして呼應することは、逆に『玉韻』などの韻目下注の信憑性を裏付けるものでもある。更に別の例を挙げると、語韻には“呂與夔同，夏侯、陽、李、杜別，今依夏侯、陽、李、杜。”とあるのに、それと相配する平聲と去聲の韻には何も注が付けられていない。一方、反切

下字の分布を見ると、語韻と變韻はいずれもⅢcとなっていて分布に秩序が見出し難いが、魚韻と御韻・遇韻はⅡ類で、単一反切下字に揃えた形跡があり、また虞韻はⅢaで、反切下字は多くの字にバラつくものの音聲的に使いわける傾向が認められ、上聲と平・去聲とでは異なった様相を呈している。これに基づくと韻目下注が平・去聲の魚韻・御韻に付けられていないのは偶然の書き落しではなく、上聲の語韻だけが異なる分韻過程を経たことを示すものであろう。このような細部に一致が見られるのは興味深い。

さて、上に挙げた諸韻が分韻されるにあたり出自となった韻、つまり上で“→”の後に記した韻を見ると、Ⅲ類となる場合もあるけれども、やはりⅠ類ないしⅡ類となっていて、しかも見母か匣母字を単一反切下字としている場合が多い。

他の韻書が區別していない韻をある韻書に従って分韻する場合、ある字がどちらの韻に属するかを決定するには後者の韻書に據らねばならないから、分出した韻だけでなく本體の側の韻でも反切を後者の韻書に従って付けることは當然期待されることである。だから、これらの相手方の諸韻の反切も夏侯詠に由来する蓋然性が高い。ただし、その中でⅢ類となっているものは夏侯詠と条件が合致しないから今は除外する。

ただし、同じく分韻と言っても、開・合や一等・三等の別のようにならざるを一韻とする韻書においても韻母としては區別されているものを別韻に分ける場合もある。この場合、韻の分合基準については分韻している韻書に従うが、反切はそれらに分韻していない韻書に基づく、ということもありうる。陽唐韻と藥鐸韻の分韻はそのようなケースだと考えられる。陽韻の韻目下注には“呂・杜與唐同，夏侯別，今依夏侯。”とあり、入聲の藥韻の注も“唐”が“鐸”となっている他はこれと同文である。また、養韻には“夏侯在平聲陽唐、入聲藥鐸並別，上聲養蕩爲疑，呂與蕩同，今別。”とあり、去聲の漾韻の注もこれと相配する去聲韻について言ったもので、状況は同じである。これによると、平聲・入聲で陽唐韻と藥鐸韻を分韻する點は夏侯詠に従ったが、上聲・去聲では夏侯詠『韻略』を参照することができなかつたようで、陸法言(ら)が平入聲にならぬ四聲相配の原則によって分韻を行なつたことがわかる。ところで、反切下字の分布を見ると、陽養漾藥韻・唐蕩宕鐸韻はいずれもⅠ類かⅡ類となっており、しかも単一反切下字は陽養漾韻開口ではそれぞれ“良・兩・亮”，唐蕩宕韻開口ではそれぞれ“郎・朗・浪”の如く來母字に揃えられている。これらの平上去聲韻は反切下字の聲母と分布が同じ特徴を示すのだから、反切の來源も同じだとすべきである。しかるに、上聲・去聲では夏侯詠に據ることができなかつたのだから、これらの反切は夏侯詠『韻略』に由来するものでは有り得ない。これらの韻の反切の出自となった韻書としては、平上去入聲ともに言及されている呂靜『韻集』が最有力候補である。そこで、陽養漾韻・唐蕩宕韻では呂靜『韻集』を主要な底本とし、拗介音の有無によって分韻するという點だけを夏侯詠に據った、と考える。なお、藥韻・鐸韻は舒聲韻とは反切下字の状況が異なるから、別途の成立過程を経たものであろう。

次に、夏侯詠と呂靜、夏侯詠と杜臺卿というように複数の韻書に據って分韻した場合を見ると、やはりⅠ類かⅡ類であり単一反切下字が見母か匣母となっているものが多い。呂靜については次節で検討するように反切下字の分布に関して夏侯詠と重なる特徴をもっており、このような場合、呂靜と夏侯詠のどちらに由来するかを區別し難い。ま

## 『切韻』反切の諸來源

た、杜臺卿『韻略』についてはその様貌があまり明らかではない。ここでは、夏侯詠の反切下字の分布特性に合致する場合は暫定的に夏侯詠に由來するものと見做しておく。

また、以上によって夏侯詠に由來すると推定される韻と四聲相配する韻も見母か匣母の単一反切下字に揃えられたⅠ類かⅡ類となっている場合が多く、そのような韻は韻目下注が付いていなくともやはり夏侯詠に由來する可能性がある。

以上の手順によって夏侯詠に由來すると推定される韻を第3節の表に實線で囲んで示しておいた。2等韻のほぼ全て、1等韻・C類韻の過半数がこれに含まれる。

これらのうち、Ⅰaとなっているものは第1小韻冒頭字が該韻内のすべての小韻の反切下字となり、しかも第1小韻の反切下字が第2小韻字となっていて直截明瞭な構成なので、これは夏侯詠『韻略』の原貌をそのまま留めたものとする。Ⅰa'は第2小韻が何らかの理由で第3小韻以下に移されたものであろう。Ⅰbは第2小韻字が韻内単一反切下字となっているもので、これは韻目の聲母を相配する他聲調の韻や同聲調内で隣接する近似韻と合わせるために第1小韻を加上したために出来たと説明される場合がある(隱韻など)。この場合、単一反切下字となっている現在の第2小韻字が本来はその韻の冒頭にあった(つまり舊韻目名であった)と推定される。Ⅰcは現在は不明の理由によって舊韻目が第3小韻以下に移されて出来たものであろう。

Ⅱbというタイプ、即ち単一反切下字を用いる本體の後に別の反切下字を用いる部分が續くという構成の存在はたいへん意味深い。このような状況は、まず主要底本によって本體を据え、そこにない字や小韻を他の諸先行韻書から補ったという『切韻』の成書過程を物語るものである。このような重層構造は實はⅢb類において更に複雑な形で見出され、ここでは詳論できないが、それらの層位わけを行なうことによって『切韻』の反切の來源を更にきめ細かく識別することが可能である。なお、ⅡbおよびⅡb'に關する主要底本の部分と(陸法言の段階での)追加部分との区分は第2節の該當箇所既記した通りである。ほか、追加小韻が本體に散發的に割り込ませられる場合も考えられ、Ⅱcはその結果出来たものと解釋する。なお、これらの追加部分がどの先行韻書に由來するかを同定する根據は今の所もちあわせていない。

### 6. 呂靜『韻集』に由來する諸韻の特徴

夏侯詠とともに『切韻』の分韻に多く關與しているのが呂靜『韻集』である。そこで、やはり呂靜に單獨で従って分けた韻をまず見てみよう：

平聲：灰(Ⅱc回fi)←哈(Ⅱb'來l)，

元(開Ⅰa言ŋ，合Ⅱb衰fi)←魂(Ⅱc昆k)，

先(開Ⅱb'賢fi，合Ⅰc玄fi)←山(開Ⅱc關fi，合一)，

尤(Ⅲc)←侯(Ⅱc侯fi)，

上聲：賄(Ⅱb'罪dz)←海(Ⅱb'亥fi)

阮(開Ⅰa偃ʔ，合Ⅲc)←混(Ⅱc本p)・俱(Ⅱa俱fi)，

梗(2開Ⅲb，2合一，3開Ⅲc，3合Ⅰa永fi)←靜(開Ⅱb郢j，合一)，

有(Ⅱb'久k)←夏(Ⅲc)，

去聲：霽（開Ⅱb'計k，合Ⅰa惠fi）←祭（開Ⅲc，合Ⅱc芮p），  
 隊（Ⅲa）←代（Ⅱa代d），  
 廢（開一，合Ⅱa）←代（Ⅱa代d），  
 霽（開Ⅰc見k，合Ⅰb縣fi）←線（開Ⅲc，合Ⅲc），  
 入聲：迄（Ⅲc）←質（開Ⅲa，合Ⅲc），  
 月（開Ⅰa調？，合Ⅱa）←沒（Ⅱc沒m），  
 屑（開Ⅱc結k，合Ⅲc）←薛（開Ⅱc列l，合Ⅲb）。

以上を見るとやはり多くがⅠ類がⅡ類となっているが，単一反切下字の聲母は見母・匣母とは限らず，影母・疑母やそれ以外の聲母の字であることも多い。また，Ⅱa，即ち音聲的な条件に應じて反切下字を使いわけるタイプとなる場合が多く見られる。このように夏侯詠とは異なる反切下字の特徴を持つから，これらの韻（の主層）では反切そのものも呂靜『韻集』から採録したものと推定してよからう。また，分韻した相手方の韻や上記の韻と四聲相配する韻にも同様の特徴を持つものが多く，それらの韻も主要部分は呂靜に由來するものと認める。このようにして推定される呂靜に由來する韻を第3節の表では點線で圍んで示してある。4等韻の多くや，1等韻・C類韻の過半がこれに該當する。

ところで，呂靜『韻集』は佚文が『玉函山房輯佚叢書』『小學鈎沈』『小學鈎沈續編』などに集められている。多くは義注のみが存佚するが，反切の見られる條目が30近くあり，上の推定と合致するか否かに興味が寄せられる。しかし，多くは『切韻』中の呂靜に由來するとは認められない韻に屬するもので，それらの反切用字は『切韻』とは一致しない。呂靜に由來すると推定される韻に屬する字も若干あり，その中には“養，於爲反”や“警，於計反”のように『切韻』と一致するものがあるものの，必ず一致するとは限らない。『韻集』の佚文資料は切韻の反切との關係を論ずるには残念ながら例が少なすぎるようである。

## 7. おわりに

以上において反切下字の選擇と韻内分布が來源の違いに應じて異なった特性を示すことを見た。ただし，これはまだ粗い輪郭を把握しただけの素描に過ぎず，『切韻』反切の由來に關しては，更に重紐韻を始めとする複雑な重層構造を成す諸韻の層位わけや反切上字の検討など『切韻』の内的根據を一方で追及し，他方では『經典釋文』、『玉篇』、『字林』などの先行資料の反切との比較——それも音類のみならず，反切の文字面に至る——を行なう必要がある。

最後に，反切下字に基づく來源の識別が反切上字の分布に對しても説明力をもつ例を二三擧げておこう。まず，舌音類隔であるが，これはほとんどが2等韻に集中して見られ，重紐韻やC類韻に現れる例は僅少である。上の議論によると，2等韻は大半が夏侯詠に由來すると推定されるのだが，夏侯詠『韻略』においては舌頭音と舌上音がまだ分化しておらず，かつ陸法言が底本の反切上字に變更を加えずにそのまま採用したとするならば，こうした現象が生じることになる。また，鑑韻には“覓，子鑑反”という齒音類隔があるが，鑑韻も夏侯詠に由來するものと推定され，この反切もやはり同様にし

### 『切韻』反切の諸來源

て『切韻』にもたらされたものであろう。ほか、月韻の“越”の反切は王二・王三・唐韻・P 3694背・廣韻では“王伐反”の如く于母の反切上字を當て、上田正氏はこれを陸法言の反切に擬しておられるが、たしかにこの方が音理には適っている。だが、文獻學的には最も早期のテキストである切三の“戸伐反”を採るのがよい。この場合、于母である“越”に對して匣母の“戸”を反切上字に當てる點は如何にして説明されるだろうか。月韻は上での議論によると呂靜に由來すると推定され、晉代(265~420)に成った『韻集』において匣母と于母の分化がまだ起こっていないことはむしろ期待される<sup>(14)</sup>ところであり、陸法言が用字の變更を加えずに『韻集』の反切を採録したためにこのような例外が生じたものであろう。

上例のような『切韻』内部で自己矛盾を成す現象は他にも隨所に認められるのだが、それらは異質の資料を綜合して一つの體系にまとめようと企圖した陸法言の努力を示す痕跡であり、『切韻』の成書過程の細部を探索するための貴重な證據となるものである。

### 注

- (1) これまでの諸説については、賴惟勤『中國語音韻研究文獻目錄』3.3.2.1.の附項「切韻所據方言」、汲古書院、1987年；坂井健一「最近の漢語音韻研究——切韻の基礎音系に関する論争——」『東洋學報』46:1, 1963年；大島正二「字音資料の取扱い方について——『切韻』の性格に関する邵榮芬説の一論據を巡って——」『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』、汲古書院、1986年などに挙げられた諸文獻を参照。
- (2) 『古音説略』、燕京學報專號之二十、1947年、2—3頁；また『陸志章語言學著作集』1、中華書局、1985年、2頁より抄引。ほか、黃淬伯(注1の坂井論文で挙げられたものの他、「切韻音系の本質特徵」『南京大學學報(人文科學)』8:3—4, 1964年もあり、東洋文庫は現在それらの掲載誌を所蔵している)や三根谷徹『越南漢字音の研究』、東洋文庫、1972年、61—62頁；尾崎雄二郎「漢字の音韻」『日本語の世界・3・中國の漢字』、中央公論社、1981年などもほぼ同意見である。
- (3) 「中古漢語の音韻」『中國文化叢書・1・言語』、大修館書店、1967年、113頁。
- (4) 「中古音重紐の音聲的表現と聲調との關係」『東京大學東洋文化研究所紀要』73, 1977年、26頁。
- (5) これに関連して河野六郎「中國語・朝鮮語」『言語の系統と歴史』、岩波書店、1971年、309—310頁；また『河野六郎著作集』2、平凡社、1979年、528頁の行文は味わい深い。
- (6) 王二・王三およびS 6156, TIV 70+71に見える。周祖謨「切韻的性質和它的音系基礎」『語言學論叢』5, 1963年；また『問學集』上冊所收、中華書局、1966年には校訂を経た一覽表が掲げられており、参照に便である。この韻目下注が『切韻』の分韻を行なった者、即ち陸法言(ら)に由來することは文面からして疑いないが、その場合『王韻』より早期のテキストである切二・切三・P 3696・P 2017などにこの注が存在しないことが問題となる。切二などのテキストが韻目下注を省略したのか、それとも『王韻』などが『切韻』とは別に傳承されていた注を韻目下に組み込んだのかどうかは未決の問題である。
- (7) 均社、1975年。
- (8) これは一見して明らかな現象なのだが、切韻系韻書の反切を包括的に扱った先人の著作・例えば陳澧『切韻考』；董同龢「全本王仁煦刊謬補缺切韻的反切下字」もと1948年、『董同龢先生語言學論文選集』所收、食貨出版社、1974年；李榮『切韻音系』中國科學院、1952年

などではとりたてて問題とされていないようである。なお、『切韻』の内部構造に基づいてその成書過程を探るといふ基本的着想において小稿が影響を受けている頼惟勳『『切韻』について』『宇野哲人先生白壽祝賀記念東洋學論叢』、1974年、1317頁；また『頼惟勳著作集Ⅰ中國音韻論集』所收、汲古書院、1989年、221頁には「…「東」韻における反切下字「紅」のように、その韻に於ける代表的な反切下字が小韻先頭字でないことがある…」(下線は引用者)とあり、この現象に既に注意が與えられている。

(9) 平山久雄「陸志韋教授「古反切是怎样構造的」を読む」『中國語學』140、1964年などを参照。

(10) 上田正『玉篇反切總覽』、私家版、1986年によって閲した。

(11) 他に例えば靜韻では反切下字の候補として“井・領・頸・餅・請”などの字があり、その中で“井・領”などは殊に好適だと考えられ、現に増加小韻はすべて“井”を反切下字としているのだが、『切韻』は“鄧”を単一反切下字としており、意圖的に反切下字を統一したことは疑いない。また、最適の字があってもその意圖がなければ韻内の反切下字が一字に揃わない例としては青韻を擧げることができる。この韻では易識易寫という點で上に出るものない“丁”という好都合の字があり、所屬小韻すべてにおいてこの字を使ってもよさそうだが、實際には舌音小韻に使われるのみで、唇音・齒音・牙喉音では劃數の多い“形”や“經”などが反切下字となっている。

(12) 龍宇純『唐寫全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋』(香港中文大學、1968年、278頁中段)はこれに基づき夏侯詠と呂靜は“靖”を韻首に置いていたと推定するが、切三では“靖”に、“出説文、新加、三”と注されているから、“靖”は『切韻』原本には收められていなかったことになり(李永富『切韻輯考』、藝文印書館、1973年、卷4、383頁参照)、疑いが残る。なお、この韻は後の議論によると夏侯詠に由來するものと推定され、夏侯詠『韻略』では“鄧韻”となっていたと考えられる。

(13) ただし腫韻は陸法言(ら)が反切下字を差し替えたときべき徵候がある。腫韻は第1小韻から第11小韻までは“隴”が単一反切下字とされており、第12小韻から第15小韻まではその他の諸字を反切下字としている。本文で行った方法によるならば、韻目下注に基づいて腫韻の本體である“隴”を反切下字とする部分を夏侯詠に由來するものとし、それ以下は増加部分だと推定することになる。しかし、“隴”は筆劃が多い點で反切用字としての適性が高いとは思われず、また夏侯詠に由來すると推定される他の韻では來母字を単一反切下字とすることがほとんどないので、疑問となる。夏侯詠由來で來母字を単一反切下字とする韻には他に闕韻があるが、この韻には反切用字に相應しい常用の見・匣母字がないという事情がある。腫韻の場合、相配する平聲の鐘韻および去聲の用韻はいずれも羊母字の“容”ないし“用”を単一反切下字としており、これらから推すと腫韻でも本來は羊母字が単一反切下字となることが期待されるところである。そして、腫韻には反切用字としても相應しい“勇”を筆頭とする羊母字が存在する。現に『經典釋文』に見える『切韻』以前の諸音義資料の反切においては腫韻字のほとんどが“勇”を反切下字としているのである(潘重規編『經典釋文韻編』、1983年序、臺灣、國字整理小組、957—967頁参照)。しかし、陸法言(ら)にとっては“勇”は時の皇太子・楊勇の名である(ないしは、あった)という特殊事情があるから、“勇”という字は忌避する必要がある。そのため夏侯詠の底本には“勇”となっていたであろう反切下字を一律“隴”に變えたものと考えられる。

(14) 羅常培「《經典釋文》和原本《玉篇》反切中的匣于兩紐」もと1937年、『羅常培語言學論文選集』所收、中華書局、1963年を参照。